

シネマ日記



No. 76

○月×日 「ジャンゴ 繋がれざる者」(クエンティン・タランティーン監督・脚本) は、そのタイトルがマカロニ・ウエスタンのヒーローの名前であることから想像できるように、痛快無比の娯楽活劇に仕上がっている。南北戦争前の米国南部が舞台。物語は、鎖につながれて移送中の黒人奴隷のジャンゴ(ジェイミー・フォックス)が、元歯科医の賞金稼ぎ(クリストフ・ヴァルツ)の手で、奴隷商人から助け出されたところから始まる。ジャンゴは元歯科医の手ほどきで射撃の名手に成長し、白人のお尋ね者を次々に撃ち殺し、賞金を稼ぐガンマンになっていく。ふたりの賞金稼ぎ

の旅は続くが、同時にかつて奴隷市場で引き離された黒人の愛する妻(ケリー・ワシントン)を探し出し、その農場主に復讐を誓う旅でもあった。その農場主は悪役を演じるのは初めてというレオナルド・ディカプリオ。また黒人ながら白人の心を持った冷酷な奴隷頭に、サミュエル・L・ジャクソンがいかにもの適役ぶりだ。撃ちあいに至るまでの、奴隷妻を救い出そうと悪党たち互いの騙し合いが見どころだが、タランティーン監督の黒人奴隷制への激しい怒りが、血しぶきの飛ぶガン・ファイトとなって、過激かつ残酷。だが、監督の映画作りを楽しむ遊び心が随所に見られ、思わず笑ってしまい、楽しい。本年度のアカデミー脚本賞を監督が、助演男優賞をヴァルツが受賞した。

○月×日 突然、旅客機が制御不能となり、急降下を始める。大惨事必至…。しかし、機長(デンゼル・ワシントン)の奇跡的な操縦術が不時着に導く。死者は出たが、大半の乗客の生命を救った。この「フライ

ト」(ロバート・ゼメキス監督)で、機長は英雄になったのも束の間のこと、機長の血液からアルコール反応が、また乗員室からウイスキーの空き瓶が見つかった一転して、犯罪者として収監されてしまう。裁判闘争の過程で、機長は嘘をつき、無罪を得ようとする。しかし「あること」から自らの真実を語ることに…。デンゼル・ワシントンの卑劣なアルコール中毒者としての表情と、高潔さを取り戻した表情の違いが印象的。むろん後者は英雄のままであり、前者は犯罪者なのだが。酒飲みには身につまされる映画でもある。

○月×日 9・11テロから10年、2011年に首謀者のビンラディンは米CIAによって殺害された。「ゼロ・ダーク・サティ」(深夜0時30分)に決行されたのだが、武装ヘリがパキスタン領内の隠れ家を奇襲攻撃。緊迫感に満ちた殺害作戦の戦闘場面はまるで実写フィルムのように。イラクでの爆弾テロを描いた「ハート・ロッカー」のキャスリン・ビグロー監督なら

ではのリアリティある演出だ。隠れ家を探し出すまでの捜査の過程がこの映画の見どころで、拷問など何でもありだが、CIAの女性分析官(ジェシカ・チャスティン)の天才的な分析力で隠れ家を割り出していく。彼らCIA職員自ら何度もテロに遭い、同僚を殺され復讐の念を強めていく。使命感を超えた復讐心が、ビンラディン殺害を成し遂げる。アメリカは目には目をの国だと改めて思う。ラスト・シーン、女性分析官の涙の表情には空しさもうかがえた。首謀者を血祭り上げても、テロは根絶できない…。

○月×日 「故郷よ」(ミハル・ボガニブ監督)は、チェルノブイリ原発事故で故郷も人生もすべてを失った人々の物語。冒頭の事故直前の住民の幸せな結婚シーンが印象的。それが普通の生活風景だけに。「遺体」(君塚良一監督、西田敏行主演)は、大震災に遭った釜石での遺体仮安置所の10日間の情景を誇張もなく丹念に描き出す。辛い映画だ。(内藤 哲)